

3 障害児（者）の遊びに関する文献検討

一邦文文献の分析より一

小 栗 亜 紀	(37回生)	高知女子大学
山 本 智 恵	(38回生)	高知県立南海学園
館 美 加	(39回生)	高知女子大学
津 野 福 江	(8回生)	高知県立子鹿園
大 井 美 紀		高知県中央保健所
山 崎 美恵子	(5回生)	高知女子大学

I、はじめに

小児にとって遊びは生活の中心であり、小児の成長発達において遊びは重要な意義をなしている。そのことは障害を持っている児でも同様であるが、障害がある場合、自ら積極的に遊ぶことが出来にくいいため、他者からの働きかけが重要となってくると思われる。しかし実際は、治療的側面や身体機能の回復に重点がおかれ、看護者は遊びの重要性を認識していても、日々のケアの中で意識的に取り組めていないことが多く、その児の身体・精神機能に合わせた遊びを通して、発達を促していくような働きかけがあまりなされていない^{1) 2) 3)}。また、障害児を対象とした遊びへのケアについての研究も少ない。

そこで、障害児の遊びに関して過去3年間の文献検索により、障害児の遊びの内容を明らかにし、今後看護者が遊びの働きかけへの知見を得ることを目的にこの文献研究を行ったのでその結果を報告する。

II、概念枠組

本研究は障害児の遊びをシステムとして捉えた。すなわち、遊びという行動がとられることについては、小児に何らかの刺激がインプットして入力され、何らかの動機づけがあり、小児の内面においてコントロールされたかたちで表現される。その遊びの結果が、学習効果として、肯定的・否定的な反応となって小児にフィードバックされて、再び新しい刺激となってインプットされるという考え方である。

障害児の遊びをシステムとして捉えていくために、環境・感覚・インプット・動機づけ・行動・アウトプットとが相互に関連しあう6つの構成要素によって成立するという概念枠組みを考えた。

今回の研究は、第一報として文献検討するにあたり構成要素の一つである行動、すなわち、障害児の遊びの内容について分析した。遊びの分類は、クラバレートによる⁴⁾ 心的諸機能に基づく活動を中心として分類した遊びと、シャロtte・ビューラーによる⁵⁾ 社会的視点から分類した遊びを参考として、今日一般化されている、感覚的遊び・運動的遊び・受容的遊び・模倣的遊び・構成的遊びに分類した。

III、文献の検索方法及び分析方法

文献検索は、1993年から1995年4月までの雑誌中の障害児の遊びに関する研究論文と1972年から1996年4月現在で発刊されている成書を検索した。その結果、雑誌の中に障害児（者）で発表された778文献、遊びで発表された121文献の中から、障害児の遊びに関して年齢・障害の内容が明記されている84文献より、また、障害児の遊

びに関する成書21冊より、障害児の遊びの種類について述べられているものを選出した。検討した文献には研究論文、事例報告を含めた。

分析方法としては、最初に文献より障害児の遊びの種類を抽出した。そして前述したクラバレートとシャロット・ビューラーの遊びの分類を用いて、感覚的遊び・運動的遊び・模倣的遊び・受容的遊び・構成的遊び別に分類した。それらの分類別にk J法を用いて、遊びの内容のカテゴリー化を行った。また、年齢や障害の内容が明記されている文献を用いて、障害児の遊び内容の発達を遊びの「テーマ」づけ及び、「ルール」という2つの視点から西頭の分類⁶⁾を用いて分析した。

障害の内容については、心身障害者対策基本法に基づく障害児分類⁷⁾を用いて、「心の働きに関する障害」すなわち精神障害群（精神薄弱、情緒障害）と「体とその働きに関する障害」すなわち身体障害群（視覚障害・聴覚障害・言語障害・肢体不自由・脳性麻痺等の中枢性の運動障害児）別に分析した。

IV、結果及び考察

I、障害児の遊びの内容の特徴について

感覚的遊びでは、「圧覚を中心とする遊び」「触覚を中心とする遊び」「温冷覚を中心とする遊び」「平衡感覚を中心とする遊び」「聴覚と上肢運動を中心とする遊び」「聴覚と全身運動を中心とする遊び」「聴覚と発語を中心とする遊び」「臭覚を中心とする遊び」「視覚を中心とする遊び」の大カテゴリーに分かれた。（表1参照）

表1 感覚的遊びの内容

大カテゴリー	中カテゴリー
圧覚を中心とする遊び	・身体のみを使う遊び
触覚を中心とする遊び	・身体のみを使う遊び ・玩具以外の物を使う遊び
温冷覚を中心とする遊び	・冷感を楽しむ遊び
平衡感覚を中心とする遊び	・一定の姿勢を楽しむ遊び ・物象の形・動きに合わせる遊び ・玩具を使う遊び
聴覚と上肢運動を中心とする遊び	・物を使う遊び ・音楽にあわせてする遊び
聴覚と全身運動を中心とする遊び	・音を出すのを楽しむ遊び ・動作を音楽の変化に合わせることを楽しむ遊び
聴覚と発語を中心とする遊び	・音の変化を楽しむ遊び ・音の模倣を楽しむ遊び
臭覚を中心とする遊び	・香りを楽しむ遊び
視覚を中心とする遊び	・物の動きを楽しむ遊び

精神障害児では、玩具や玩具以外の物を使ってする遊びはほとんどみられず、身体の一部の触覚、平衡感覚、聴覚、温冷覚等を使っの遊びがみられた。

身体障害児では、聴覚を使う遊びの中でも、自分が出す音を楽しむ遊びはみられたが、音楽に合わせる遊びは

みられなかった。また、他者の介助を要しての全身を使う遊びの傾向にあった。音楽に合わせる遊びがみられなかったのは、身体障害があるために感覚受容のレベルが感覚運動の段階⁸⁾にあり、聴覚受容が強まると運動表現が止まってしまうためではないかと考える。

運動的遊びでは、「粗大運動を中心とする遊び」「巧緻運動を中心とする遊び」の大カテゴリーに分かれた。（表2参照）

表2 運動的遊びの内容

大カテゴリー	中カテゴリー
粗大運動を中心とする遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・身体のみを使う遊び ・玩具・遊具を使う遊び ・玩具以外のもの（土・砂・水等）を使う遊び ・音楽や曲に合わせる遊び
巧緻運動を中心とする遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・身体のみを使う遊び ・玩具・遊具を使う遊び ・玩具以外のもの（土・砂・水等）を使う遊び ・音楽や曲に合わせる遊び

精神障害児では、全身の諸機能を使つての遊びで、遊びの空間は比較的広く、単純な刺激の感覚遊びに近い遊びであった。また「粗大運動を中心とする遊び」「巧緻運動を中心とする遊び」のどちらも単調な遊びであり、注意を必要としたり、持続を要する様な遊びではなかった。精神障害児は、知的な行動、人格、社会的な行動など、精神活動のあらゆる面で大なり小なり障害を持つが、身体面でも、スタミナ不足であったり、感覚機能の障害を持っていたりする。また、目と手の協応、手先の作業をはじめ、走力や跳力などの体力、とりわけ柔軟性と平衡感覚を必要とする運動に劣る傾向にあるので、このような運動的遊びの内容になっているのではないかとと思われる。

身体障害児では、玩具を使い、創造性や思考を必要とするような複雑な遊びも可能であり、健常部位を使って他者と共に楽しむ遊びがみられた。また、スピードと敏捷性を必要とするような遊びや静的なバランスをとる必要のある遊び、柔軟性を必要とする遊びはあまりみられなかった。これは、何らかの身体障害をもつことにより敏捷性・柔軟性・平衡感覚が障害されるために、その他の能力を使った遊びを行っているのではないと思われる。

受容的遊びでは、「物象をみて楽しむ遊び」「人の動きをみて楽しむ遊び」の大カテゴリーに分かれた。（表3参照）

表3 受容的遊びの内容

大カテゴリー	中カテゴリー
・人の動きを見て楽しむ遊び	・人の動きを見て楽しむ遊び
・物象の動きを見て楽しむ遊び	・絵本を使う遊び

精神障害児では、今回検討した文献の中には受容的遊びと考えられる遊びはみられなかった。それは、注意の集中と持続を要する遊びについては、精神障害児にとって難しいことが指摘されており⁹⁾、受容的遊びをしていても持続時間が短いなどにより看護者が捉えにくいのかかもしれない。

身体障害児については、今回検討した文献の中ではほとんど取り上げられていなかった。

模倣的遊びでは、「人の模倣の遊び」「乗り物の模倣の遊び」「動物の模倣の遊び」「事象の模倣の遊び」の大カテゴリーに分かれた。（表4参照）

表4 模倣的遊びの内容

大カテゴリー	中カテゴリー
人の模倣の遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭の模倣をする遊び ・店の模倣をする遊び ・人形を使う遊び
乗り物の模倣の遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・空想上の乗り物の模倣をする遊び ・交通機関の乗り物の模倣をする遊び ・動物の乗り物の模倣をする遊び
動物の模倣の遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・動物の模倣をする遊び
事象の模倣の遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・風・木などの自然を模倣する遊び ・玩具の模倣をする遊び ・物の模倣をする遊び

模倣的遊びは、想像力が活発に働き、多くは相手がいないと成立しないものであり、社会性の発達を促すものである。精神障害児の模倣的遊びの特徴をみると、一つの動きを繰り返す単純なものや、破壊的、単調的、あるいはストーリー性のないものであった。精神障害児は、ことばを通して所定の事実をそのまま述べることはできても、ことばで意思を表現するとか、予想をこらして推理をめぐらせ、それらをことばで述べるという活動に乏しい傾向にある¹⁰⁾。このようなことから、多くの言葉や想像を必要とするような複雑な模倣的遊びは、精神障害児にとっては難しいのではないかと考えられる。

身体障害児では、複雑な模倣やストーリー性のあるものがみられた。これは、身体障害児の場合視覚障害・聴覚障害・言語障害があっても、想像力や社会性の発達により、健常部位や残存機能を使つての複雑な模倣を取り入れた遊びが行われているのではないと思われる。

構成的遊びでは、「単語・文章・ストーリーを構成する遊び」「型を構成する遊び」「四肢・躯幹を使って構成する遊び」の大カテゴリーに分かれた。（表5参照）

表5 構成的遊びの内容

大カテゴリー	中カテゴリー
単語・文章・ストーリーを構成する遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・事象を再現してストーリーを構成する遊び ・文字や言葉を使って単語や文章を構成する遊び
型を構成する遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土・砂・泥を用いて形を構成する遊び ・組み立てて形を構成する遊び ・書き描き形を構成する遊び ・はさみを使って形を構成する遊び ・合わせたり、対応させたり、折ったりして形を構成する遊び
・四肢・躯幹を使って構成する遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・四肢・躯幹を使って構成する遊び

精神障害児の特徴として単調単純、破壊的、持続性の欠如、言語介入しないといったことがいわれている¹¹⁾。それは、精神障害児が、自分で物事を記号化したり、言語で表現して、推理や判断、思考の糧とすることには劣

っていたり、動作的、映像的なイメージによる事象を言語的なかたちに移換するのが難しいので、ものを認知するための機能としての動作や映像と言語との三者間の相互交錯が成立しにくい為であると考えられる。

身体障害児は、話やストーリーを構成する遊びの傾向にあり、次々と発展していく内容の遊び方がみられた。しかし、「四肢・軀幹を使って構成する遊び」はみられなかった。これは、身体障害児の場合、随意運動の障害、不随意運動の出現、筋緊張の亢進や視聴覚障害などから体やその一部を使って何かをつくる、表現するということは難しく行われにくいのではないかと考えられる。

Ⅱ、障害児の遊び内容のテーマづけやルールの発達について

1、精神障害児の遊び内容の発達の特徴について（表6～表9参照）

遊びの内容としては、「氷による口への刺激を楽しむアイシング」や「ぶらぶら歩き回ったり、傍観者としての一人遊び」「トイレのコックを押して、水の流れを見つめる遊び」等で、遊びの発達段階では全体的にみると「テーマ」も「ルール」もない遊びであった。すなわち「遊び以前」「傍観の遊び」「単なる模倣遊び」の段階にとどまっていた。

西頭は、年齢と共に「テーマ」のある遊びが増大し「単純な行動を繰り返す遊び」が減少すると指摘している¹²⁾が、精神障害児の場合は、「テーマ」も「ルール」もない遊びのままの段階であった。

精神薄弱児の特徴としてギルフォードは、硬さ、目的指向性の乏しさ、活動意欲の乏しさを挙げている¹³⁾が、精神障害児は他にも協調性の欠如、言語の不適切な使用、抽象的観念を扱うことが出来ない等の特徴がいわれている¹⁴⁾。遊びの中で「テーマ」や「ルール」が出来てくるためには、言語機能の発達は大変重要となってくる。前述のように精神障害児は、特に言語に関してその機能が劣るということから、「テーマ」や「ルール」を持つ遊びの発達への妨げになっていると考えられる。

2、身体障害児の遊び内容の発達の特徴について（表6～9参照）

感覚的遊びは「針がレコードの上をグルグル回のを見る」「トイレットペーパーをひっぱる紙遊び」など全体的に「テーマ」も「ルール」もない段階の遊びであった。これは身体障害児で麻痺がある場合はその部分の触覚・痛覚等も鈍くなったり、また視聴覚障害や感覚統合の障害も考えられるため、このような段階の遊びにとどまっているのではないかと考えられる。

運動的遊びは、「寝返りの動作をする」「他児を相手に大きな声を出しながら行うボール遊び」「他と順番を守り、介助なしで滑り台を滑る」などそれぞれの段階の遊びがみられた。障害児にとって、運動的遊びをする場合、安全性の面から何らかの介助が必要であると思われ、年齢に伴い遊びが発達するというよりは、その児の障害の部位や程度に応じた遊びを介助者が提供しているからではないかと考えられる。

模倣的遊びは「お店屋さんごっこ」や「歯医者さんごっこ」等のごっこ遊び、すなわち「テーマ」も「ルール」もある遊びがみられ、また高年齢になるにつれて、遊びの「テーマ」も「ルール」もできてくる傾向にあった。これは、身体障害児の場合模倣的遊びに限り、視聴覚などからの感覚刺激を受けて、それを処理し表出するという一連の流れが可能で、正常児と似たような発達過程をたどるのではないかと考えられる。

表6 感覚的遊びの発達段階

段階	名 称	身 体 障 害 児	精 神 障 害 児
Ⅰ	遊び以前		
	傍観的遊び	・針がレコード上をぐるぐる回るのを見る(4才)	
	単なる模倣遊び		
Ⅱ	テーマも「ルール」もない遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・手につばをつけ、泥をこねる泥遊び(2才) ・車のおもちゃを口にもっていく車のおもちゃ遊び(2才) ・トイレットペーパーをひっぱる紙遊び(4才) 	<ul style="list-style-type: none"> ・氷による口への刺激を楽しむアイシング(3才) ・物をたたいたり、ひっぱったり、くるくる回して遊ぶ(4才) ・水道の水を舌で受けたり、髪や顔を濡らして感覚を楽しむ水遊び(小学生) ・和式水洗トイレのcockを押して、水の流れを見つめる遊び(小学生)
	テーマはあるが「ルール」のない遊び	・ビー玉をはじいたり、転がるのを見たり、気に入った音を鳴らして楽しむビー玉遊び(2～7才)	<ul style="list-style-type: none"> ・小さな輪をくるくる回して遊ぶ(2才6ヶ月) ・雪の上に寝ころんだ時にできる、自分の体の跡を楽しむ雪の中の天使遊び(12才)
	テーマがあり、「ルール」がでかけける遊び		
Ⅲ	テーマがあり「ルール」がある遊び	・こおろぎと一緒にトランポリンで跳ねあがって遊ぶこおろぎ遊び(8才10ヶ月)	<ul style="list-style-type: none"> ・竿を二人でひっぱるひっぱりっこ遊び(4才) ・音楽に合わせて体を動かし、拍子を取り歌う(4才)

表7 運動的遊びの発達段階

段階	名 称	身 体 障 害 児	精 神 障 害 児
I	遊び以前	・寝返りの動作をする(4才) ・ハンモックで揺らす(4才)	
	傍観的遊び		・ふらふら歩きまわったり、傍観者としての一人遊び(4才)
	単なる模倣遊び		・付近の田圃の草花を他の友達について摘む(9才)
II	テーマも「ルール」もない遊び	・はじく、転がるのを見る。 音を鳴らすなどのビー玉遊び(2~7才) ・風呂場で水遊び(4才)	・車のついたおもちゃを押す、ひっぱる遊び(4才) ・両手でしっかり持って、すべり台を滑る遊び(4才) ・ハンモック、タイヤ、揺れ木馬等揺れ遊具遊び(14才)
	テーマはあるが「ルール」のない遊び	・他児を相手に大きな声をだしながら行うボール遊び(4才) ・こおろぎをトランポリンに置き、自分がジャンプするのと同時に跳ねあがれるこおろぎ遊び(8才10ヶ月)	・よじ登ったりの全身運動(4才)
	テーマがあり、「ルール」がでかけける遊び	・山やトンネルを作り、穴を掘って水を入れる砂場遊び(8才10ヶ月) ・砂や水のはいったバケツにおもちゃを入れたり、出したりする遊び(8才10ヶ月)	
III	テーマがあり「ルール」がある遊び	・音楽に合わせて体を動かし、拍子を取り、歌う(4才) ・他の順番を守り、介助なしですべり台を滑る(4才) ・見つけられるのを待ち「どこだ」と探していると「はい」と答えるかくれんぼ遊び(8才10ヶ月) ・サッカー遊び(8才10ヶ月) ・野球ゲーム(8才10ヶ月) ・バトミントン(8才10ヶ月) ・電車遊び(8才10ヶ月) ・ウーターゲームのバスケット(8才10ヶ月)	・筆を二人でひっぱりっこする遊び(4才) ・踏み石を置き一方から一方へ渡ってゆく石踏み遊び(16才4ヶ月)

表8 模倣的遊びの発達段階

段階	名 称	身 体 障 害 児	精 神 障 害 児
Ⅰ	遊び以前		
	傍観的遊び	・他児とともにクリーピングカーに乗り、ただ散歩する遊び（4才）	
	単なる模倣遊び	・空のコップにお茶をついで単にお茶を飲むふりをするままと遊び（4才）	・床に立ち数秒間姿勢を保つ彫像ごっこ遊び（16才4ヶ月）
Ⅱ	テーマもないし「ルール」もない遊び		・人形をただ風呂に入れる遊び（4才）
	テーマはあるが「ルール」のない遊び		・汚れたふきんなどを洗うままと遊び（8～11才）
	テーマがあり、「ルール」がかけられる遊び	・砂場でままとセットを用いて砂で食べ物を作り皿に入れて他患児にあげたり話しかけたりするままと遊び（4才）	・食べ物を作り皿に入れたり、話しかけながら他者と遊ぶままと遊び（4才） ・サラダ、アイスクャンディーなどの食べ物を作ろうとするままと遊び（8～11才）
Ⅲ	テーマがあり「ルール」がある遊び	<ul style="list-style-type: none"> ・水鉄砲遊び（8～11才） ・果実模型をレーンの上から転がしレーンの下にいる子が店を作るお店屋さんごっこ（6～7才） ・電車遊び（8～11才） ・ハンバーガーショップのお店屋さんごっこ（8～11才） ・歯医者さんごっこ（8～11才） ・2階建ての人形の家で人形をあやつる人形遊び（8～11才） ・城を池のある庭に置き、ランプや線路や貝殻を置く箱庭遊び（8～11才） ・箱庭にこおろぎの家を作り、様々なものを置いて遊ぶ箱庭遊び（8～11才） 	<ul style="list-style-type: none"> ・鎖のついた熊のぬいぐるみを散歩させる人形遊び（6～7才） ・レーンをつないでつなげる汽車の線路作り（8～11才） ・父母の役割を決め、その衣装を身につけて行うままと遊び（8～11才） ・牛乳瓶のふたで作ったお金や、粘土の野菜やパンを作って役割を決めて行うお店屋さんごっこませ（8～11才）

表9 構成的遊びの発達段階

段階	名 称	身 体 障 害 児	精 神 障 害 児
I	遊び以前		
	傍観的遊び		
	単なる模倣遊び	・ 同一体位で座り、同じただの丸ばかりを描く遊び (4才5ヶ月)	
II	テーマも「ルール」もない遊び	・ 手につばをつけ、ただ単に泥をこねるだけの遊び (2才6ヶ月) ・ 机の上の洗面器に水、石鹼水、小麦粉、びー玉をいれたりする遊び(2才6ヶ月) ・ 粘土をちぎったり、伸ばしたり、丸めたりする粘土遊び(4才5ヶ月)	
	テーマはあるが「ルール」のない遊び	・ 絵は気にせず、自由気ままに色を塗るぬり絵遊び (4才) ・ 砂場で山、トンネルを作ってたただ水を入れたりする砂遊び(8才10ヶ月) ・ 砂で山を作り、山にブルドーザー、電車、トラックを置いたり、どんぐりを埋めたりする砂遊び (8才10ヶ月)	
	テーマがあり、「ルール」がでかけける遊び	・ アイスクリーム作りのままごと(8才10ヶ月)	・ レールをつなげる汽車の線路作り遊び (11才10ヶ月) ・ 簡単なおもちゃをバラバラにしたり組み立てようとする遊び(4才)
III	テーマがあり「ルール」がある遊び	・ 箱庭にこおろぎの家をつくったり、様々なものを置いて遊ぶ箱庭遊び(8～11才) ・ 児が机を指し、母親が「つ」と言うと、児が「くえ」というような言葉遊び(4才) ・ 砂場でままごとセットを用いて、砂で食べ物を作り、皿に入れて他患児にあげたり、話しかけたりするままごと遊び(4才5ヶ月) ・ 切片を渡したりするはめ板パズル(6才3ヶ月) ・ 台上で動く蛇の首に、その蛇と同色のリングをかけるゲーム遊び(4才5ヶ月) ・ 釘と板で箱をつくり、絵の具で色をぬる遊び (8才10ヶ月) ・ くじを引いて当たったものの絵を描いたり、遊んだりするくじ引き遊び(8才10ヶ月)	

V. 結 論

精神障害児の遊びの特徴については

- ① 感覚的遊びでは、体の一部分圧覚、臭覚、視覚、温冷覚を使って遊ぶ傾向にあった。
- ② 運動的遊びでは全身を使う遊びで、単純な刺激の感覚遊びに近い遊びであった。

- ③ 模倣的遊びでは単純な繰り返しが多く、破壊的で、ストーリー性のない遊びであった。
- ④ 構成的遊びでは、単調単純・破壊的・持続性のない遊びで、言語をあまり必要としない遊びであった。

身体障害児の遊びの特徴については

- ① 感覚的遊びでは、障害の程度により遊び内容に制限があり、全身を使う遊びの傾向にあった。
- ② 運動的遊びでは、玩具の使用・創造性・思考性があり、全身を使う遊びの傾向にあった。
- ③ 模倣的遊びでは、複雑な模倣やストーリー性のある遊びであった。
- ④ 構成的遊びでは、ストーリーを構成する遊びがみられた。

そして全体としては、身体障害のため、他者の介助を要する遊びであった。

精神障害児の遊びの文献数は身体障害児の文献数にくらべて少なく、これは精神障害児の特徴として、障害が目に見えにくく、反応に乏しい傾向があり、その子どもの知的レベルの見極め、指導方法の難しさがいわれている¹⁵⁾ことから、遊び相手になることが難し文献にも取り上げられにくいのではないかと考えられる。

今回の研究において、概念枠組みで述べたように、障害児のあそびをシステムとして捉えたとき、その構成要素の一つである行動すなわち障害児の遊びの内容を文献により明らかにしてきた。今後は、他の構成要素についても明らかにするとともに、遊びがもたらすその学習効果との関連性も検討していきたいと考える。

引用・参考文献

- 1) 藤原千恵子、豊川恵子：入院患児の遊びの援助にかかわる人的要因—看護婦の意識調査の結果から—、小児看護、15(8)、p1006-1014、1992
- 2) 廣末ゆか：小児看護におけるケアの現状—看護婦の認識から、小児看護、16(7)、p871-880、1993
- 3) 兼松百合子：入院中の遊びと看護、小児看護、9(4)、p405-411、1986
- 4) E. Claparède: Psychologie de l'enfant et pédagogie expérimentale, p98, 1909
- 5) Ch. Buhler: Kindheit und Jugend, Leipzig, 1928
- 6) 西頭三雄児：遊びと幼児期—人間形成の視点から、福村出版、1975
- 7) 水野重史、依田明編：発達心理学への招待 4 教育と発達、p169、新曜社、1983
- 8) 宇佐川浩：感覚と運動の高次化と自我発達、全国心身障害児福祉財団、1989
- 9) 同上 7)p174
- 10) 同上 7)p175
- 11) 同上 7)p174
- 12) 同上 6)p139-142
- 13) Guilford, J. P.: Traits of creativity, In Anderson, H. H. Harper, 142-161, 1959
- 14) 同上 7)p183
- 15) 井谷善則編：「発達の力」を生かす障害児 指導、p17-27、明治図書、1988